

小特集②

ミャンマー総選挙 —NLD 選挙戦にのしかかった反イスラムの圧力—

2015年11月8日、ミャンマーで上下両院の総選挙が行われ、アウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟（National League for Democracy: NLD）が改選議席491議席の約8割にあたる390議席を獲得する圧勝をおさめた。NLDの優勢が確実視される中、地方の少数民族政党の伸びと宗教動向（イスラム教徒への仏教徒の反感）の二要素が、NLDの「勝利の程度」を左右するとみられていた。本稿では、イスラム教徒の選挙参加、仏教徒の反イスラム運動、NLDの集票が伸び悩んだ西部ラカイン州の動向を整理する。なお、イスラム教徒の選挙参加については過去の『ラク便り』の採録時期分の情報も、必要に応じてまとめた。

1. イスラム教徒の選挙参加

今回の選挙では、事前の法改正や資格審査を通して、イスラム教徒の選挙参加が事実上制限された。まず、2015年2月にはロヒンギャ族に発行されていた一時身分証が廃止されるとの通達がなされた。ミャンマー政府はロヒンギャ族をバングラデシュからの不法移民と見なしており、市民権を与えていなかったが、2010年選挙では投票権が与えられていた。2月10日に成立した国民投票法も、一時身分証の保持者に投票権を与えると定めていたが、仏教徒や僧侶らがこの規定に強く反対したため、一時身分証そのものを廃止することでロヒンギャ族の選挙参加を事実上封じた。

また、2015年9月に行われたミャンマー連邦選挙管理委員会の資格審査で、総選挙への立候補届を出したイスラム教徒らの「大半」が不適格とされた。不適格者88人は、地域別にみると西部ラカイン州に28人と最も集中していた。与党の連邦団結発展党（Union Solidarity and Development Party: USDP）からの当選実績もあるイスラム教徒議員は、党の公認を受けられず、無所属で立候補申請したが、不適格となった。アウンサンスーチー氏が党首を務めるNLDは、数十人のイスラム教徒候補者の擁立を検討していたが、「イスラム寄り」との批判を避けるため、擁立を見送った。スーチー氏は、立候補を希望したイスラム教徒に、「今回は我慢してほしい。まず民主化を実現するために」と頭を下げたと伝えられる（東京10/31、毎日11/2）。[→『ラク便り』66号43頁、68号38頁参照]

2. 仏教団体マバタの反イスラム運動とNLD批判

イスラム教徒の境遇に同情的と言われるスーチー氏及びNLDがこのような態度をとる背景には、NLDへの批判を繰り返す仏教団体「仏教保護機構（通称マバタ）」の活動がある。マバタは、反イスラム教運動を続ける高僧ウィラトゥー師らにより2013年6月に結成され、仏教徒とイスラム教徒の「衝突」を背景に急速に拡大した。現在は全国に200以上の支部を持ち、国内の仏僧約30万人がマバタの賛同者とされる（ミャンマー国内の全仏僧は推計約50万人）。2015年8月31日までに成立した人口抑制法、改宗法、仏教徒女性特別婚姻法、一夫一婦法（「民族・宗教保護法」と総称される）は、マバタが法案提出から成立まで強力な後押しをしたことが知られる。2015年9月には、民族・宗教保護法四法の成立を祝し、

法案を支持した連邦議会議員らを称える全国規模の集会を、マバタが主催すると報じられた (Myanmar Times9/3) ⁽¹⁾。[→『ラク便り』68号38頁参照]

NLDは、ロヒンギャ問題への明言は避けてきたものの、民族・宗教保護法案の審議では、「宗教の自由を脅かす」「人権侵害にあたる」などとして反対を表明した。これを受けて、マバタはNLD批判を強めた。マバタは9月以降、「法律に反対する候補や政党に投票しないように」、「NLDが勝てば、カラー（イスラム教徒の蔑称）がこの国を統治する」、「NLDはこの国の仏教にダメージを与えている」などと主張して反NLDキャンペーンを展開し、全国の支部を通じて与党USDPへの支持を訴えたとみられる。ミャンマーの仏僧は政治関与を禁じられており、選挙権を持たないが、仏教徒大衆への強い影響力を持つ。NLDは、マバタの活動が、憲法で禁じられた「宗教の政治利用」であるとして選挙管理委員会に申し立てたが、政党や候補者による政治利用ではないとして、対応は取られなかった(日経10/10、毎日10/25ほか)。

3. ラカイン州とNLD

西部ラカイン州では、2012年4月に仏教徒のラカイン族とイスラム教徒の少数民族ロヒンギャ族の衝突が起きて以降、州内のイスラム教徒が大量に避難民化するなど、イスラム教徒と仏教徒の緊張関係が続く。スーチー氏は、2012年6月に北部シットウエーで衝突が再燃した際、「多数派は寛大で同情的であるべき」、「宗教や民族にかかわらず、みな仲良くしてほしい」と語ったとされる。しかし、ロヒンギャ族を不法移民と見なすラカイン族は、ロヒンギャ族を少数派と捉えるスーチー氏の発言に反発。ラカイン州の多数派ラカイン族が、ミャンマー全体では少数派に当たるという背景もあり、同州ではアラカン民族党 (ANP) が高い支持を受けていた。

スーチー氏は、10月16日にラカイン州入りしたが、反スーチー感情が強いとされる同州北部での遊説は行わず、南部の都市で選挙集会を開いた。集会会場はいずれも1万人を超える集客となり、NLDが掲げる「変革」への期待の高さが裏付けられる一方、演説後は「NLDが政権を取ったら、イスラム教徒が力をつけるのではないか」、「(あなたは) 仏教徒を重んじていないと言われるが」、「あなたが政権を握れば本当にイスラム教徒を優遇するのか」など、反NLDキャンペーンをなぞる質問が繰り返された (朝日10/17、毎日10/29)。

4. 選挙結果

NLDは、国政・地方選挙の両方で地滑り的な勝利を収めた。連邦議会では上下院合わせて、民選議席の8割に当たる390議席を獲得した。全議席の4分の1を占める軍人議席を含んでも、単独で過半数を確保したことになる。対して、与党USDPの獲得議席数は上下院で42議席に止まり、現職大臣ら有力候補者も多くが落選した。少数民族地域でも、少数民族政党が優勢との予想を裏切り、多くの州でNLDが民選議席の3分の2以上を確保した。しかし、ラカイン州ではアラカン民族党が全体の約7割 (上院8割、下院7割、州議会6割) を占めて他党を圧倒した (読売11/21、Myanmar Times11/24、25) ⁽²⁾。

マバタを率いる高僧ウィラトゥー師は、11月12日、現地英語紙『ミャンマー・タイムズ』のインタビューに応じ、選挙結果について「NLDがこれほどの勝利を収めるとは想像していなかった」とコメントした。また、NLDについて、「彼らがよい行いをすれば幸福だが、民族と宗教を攻撃するのではと憂いている」などと発言した (Myanmar Times11/12) ⁽³⁾。

註

(1) “Ma Ba Tha to celebrate passage of race & religion laws,” Myanmar Times, 2015.9.3.

(2) “The fighting peacock spreads its tail: Final results graphics,” Myanmar Times, 2015.11.24; “Ballot recount in Shan State sends USDP seat to ethnic party,” Myanmar Times, 2015.11.25.

(3) “U Wirathu ‘surprised’ by strong NLD victory,” Myanmar Times, 2015.11.12.

[文責：光成歩]